学べるゲラ

第63回

幼なじみ3人、父子2代漁師デビュー

※2024年5月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

子どもの頃から、漁に出るたびに取れたてのブリやサバ、アジを発砲スチロールいっぱいに入れて持ち帰ってきた父を見てきた。そんな3人がこの春、高校を卒業して漁師としてデビューした。

3人は坂角倖成（こうせい）さんと中村優雅（ゆうが）さん、沖崎瑛大（えいた）さん。大中型巻き網漁船団5隻の中の本船「第18輪島丸」（重さ135㌧）で漁に出る。地元では、5隻による漁船団を「輪島丸」と呼んでいる。

3人とも石川県輪島市の港町生まれで、3人の父親は輪島丸の船員だ。坂角さんの父はいつも、持ち帰った魚を台所で豪快に裁き、家族に振る舞ってくれた。坂角さんは「こんなかっこいい漁師になりたい」と憧れていた。

輪島丸の猟は他の船とは違い、先進的な手法を取り入れている。取ったブリを海水入りの水槽で生きたまま港まで運び、水揚げした後に生け締めする。従来からの方法より新鮮な状態で出荷でき、高い値段で売ることができる。販売単価が上がれば漁獲量を抑えられ、操業時間の短縮につながる。持続可能な漁として巻き漁業では全国で珍しい試みとされる。3人は、そんな輪島丸の一面にも引かれた。

坂角さんは「輪島丸なら将来にわたって良い仕事を続けられるのかな」という思いを抱いて、他の2人と一緒に船員になることを待ち望んでいた。

ところが、1月に能登半島地震

に襲われた。5隻のうち、2隻は金沢港（金沢市）に係留されていたため、津波の影響はなく損傷はなかった。残りの2隻がつながれていたのは、甚大な被害が出ていた同県珠洲（すず）市の蛸島（たこじま）漁港。船員が1月5日ごろに2隻の無事も確認した。

ただ当時、能登半島の海岸の一部では、地盤が隆起していると報じられていた。港によっては海水が引いて海底がむき出しになり、漁船がデッドロックに乗り上げたような状態になっていた。蛸島漁港の海底も隆起し、水深が浅くなっている恐れがあった。

「船を港から出せんかもしれん」。坂角さんは父からそう言われ、「4月から漁師になれず、職に就けないかもしれない」と不安を感じた。

そんな時、心を支えになったのが中村さんと沖崎さんの存在だった。中村さんとは中学校まで、沖崎さんとは高校まで一緒に育った幼なじみ。坂角さんが不安を口にすると、沖崎さんから「きっと大丈夫や」と励まされた。坂角さんは「1人だけなら落ち込んだままだったが、相談し合える存在がいることは、とても心強かった」と振り返る。

1月下旬ごろ、「港内は隆起している場所もあるが、水深が深いままの場所もある」と船員が聞き、2隻を港から出した。輪島丸での漁が再開できたのは、2月に入ってからだ。坂角さんは「漁をできるのが当たり前ではないと再認識した」と話す。

4月から漁師としての道を歩みき始めた3人。いざ第18輪島丸に乗って、坂角さんは「思ったより揺れるので船酔いした。漁船で海に出られてうれしい」と言って笑顔を見せた。

「自然豊かでおいしい魚を食べられる輪島が大好き。『輪島』の名前が付く船の漁師として自覚を持ち、できるだけ多くの魚を取って古里の人たちに届けたい」。3人の共通した思いだ